特別支援教育センター震災プロジェクト５つの取り組み

「今何が必要か！今何ができるか！」を常に意識した学校支援

１　はじめに

平成２３年３月１１日，あの東日本大震災以降，特別支援教育センターでは，被災した障害のある子どもたちのために，今できることは何か，今必要な支援は何か，どんな課題があるのかを模索してきた。障害のある子どもたちは避難所で落ち着かず，奇声を発したり，歩き回ったりして迷惑をかけてしまい，結局，被災した自宅や自家用車の中で生活を余儀なくされている。また，就学先が被災し，どうしたらいいか不安である。余震におびえ精神的に不安定になっている等の声が多くもたらされた。人事異動時期とも重なったが一刻も早い対応に迫られ，新メンバーで，４月，震災プロジェクトを立ち上げて，図１のような５つの取り組みを開始した。

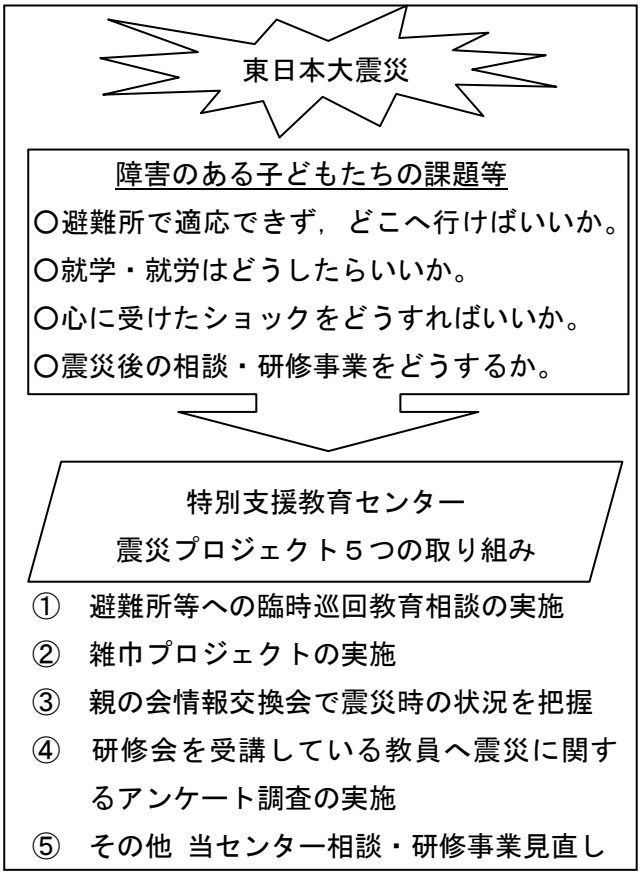

図１　震災プロジェクト５つの取り組み

２　震災プロジェクト５つの取り組み

（１）避難所等への臨時巡回教育相談の実施

特別支援学校の実情及び被災した家族の状況と避難所の実情，避難している子どもたちの行動の様子や困り感などを把握するために，平成２３年４月１１日（月），１５日（金）の２日間にわたり，臨時巡回教育相談を実施した。

巡回した場所は次のとおりである。

【特別支援学校８校】

気仙沼支援学校，石巻支援学校，迫支援学校，金成支援学校，利府支援学校，名取支援学校，支援学校岩沼高等学園，山元支援学校。

【避難所２８か所】

気仙沼小学校，気仙沼中学校，気仙沼高等学校，興福寺，ケーウェイブ，湊小学校，渡波小学校，遊楽館，第２ひたかみ園，岩沼市農村改善センター，亘理高等学校，亘理・吉田小学校，山元・山下中学校，南三陸ベイサイドアリーナ，志津川小学校，志津川中学校，志津川高等学校，入谷小学校，入谷公民館，旧鱒渕小学校，旧嵯峨立小学校，津山林業総合センター，登米公民館，登米武道館，旧善王寺小学校，伊豆沼ウェットランド交流館，鳴子ホテル，鳴子農民の家。

当センター指導主事２名一組で上記の数か所ずつを巡回し，聞き取り調査を実施した。

その結果，南三陸地域においては，避難所で発達障害のある高校生１名が，困難を示していたり，発達障害のある幼児の保護者から就学先をどうしたらいいか不安の声が上がったりしていた。

また，石巻地域の避難所では，発達障害のある子どもへの支援の仕方を是非知りたいとの要望があった。

そこで，特別支援教育センターでは，次のような具体的な対応をした。

【特別支援教育センターの対応】

① 二次避難先の鳴子ホテルへ臨時の巡回教育相談を行うために足を運び，避難所の運営責任者の方々に，障害のある子どもの理解と対応について具体的に説明をしてきた。

② 南三陸地域の避難所を訪問して，具体的に就学や進学，就労先の確認と対応ついて助言をしたりした。

③ 石巻地域の避難所の責任者の方に，自閉症のある子どもの特性や対応の仕方についての掲示用パンフレットを提供したところ，さっそく掲示して活用してもらった。

今回，臨時に避難所等を巡回して分かったことは，避難所の責任者や担当職員の方々が障害のある子どもの現状を把握し切れていないのが実態であるということであった。

（２）雑巾プロジェクトの実施

全国の友人知人に対して，被災地の学校などへ雑巾を送ってほしいという呼びかけを当センター三浦由美指導主事の発案で実施した。

すぐに，メールで協力の申し出があり，段ボール箱いっぱいの雑巾が当センター宛に送られてきた。さっそく被害が大きかった沿岸の学校へ配付した。全国の善意は更に広がり，平成２３年１１月末現在，約４５校から段ボール箱で約５０箱分，約５，０００枚の雑巾が寄せられた。

そこで，雑巾をいち早く届けるために，被災地域にある特別支援学校の協力をお願いした。県南地域は，山元支援学校の協力で配付し，南三陸地域は気仙沼支援学校，石巻地域は三浦指導主事が配付した。また，当センター主催の研修会の受講者に対しても，雑巾プロジェクトを説明し，必要な学校に対してとりあえず必要な枚数を配付した。

この活動については，特別支援学校の生徒会で取り組んだり，作業学習で製作して送ってくれたりした事例が多く見られた。茨城県鉾田市立鉾田小学校の学校だよりや佐賀県唐津市立鏡山小学校５年２組学級通信などでも紹介された。**佐賀新聞（平成２３年５月２４日付）**でも紹介されたのでここに掲載する。

石巻へ友情の雑巾

現地の声聞き300枚送る

授業で手作り 激励文添え

唐津市鏡山小

唐津市

東日本大震災の被災地の声に応えたいと、唐津市の鏡山小（青木一記校長、751人）が、宮城県石巻市に雑巾300枚を送った。「泥だらけの校舎を掃除するのに雑巾が足りない」と現地からメールが届いたのがきっかけ。各家庭から持ち寄ったほか、子どもたちが授業で手作りし、「がんばれ東北」などとメッセージも書き込んでいる。

6年生が家庭科の授業で作ったメッセージ入りの雑巾＝唐津市の鏡山小

4月下旬、同校教諭の西貴子さん（44）のもとに宮城県特別支援教育センターで働く友人の三浦由美さんから「石巻では雑巾が足りない。県は予算がなくてすぐに動けず、欲しいものが手に入らない」とメールが届いた。

西さんらは早速、校内で協議。全校に呼び掛けたところ、各家庭から続々と雑巾が集まった。6年生120人は家庭科の授業で手作りし、「夢をあきらめない」「絆」佐賀県唐津市鏡山小」とエールを添えた。11日に300枚を現地に直送し、13日に三浦さんから「助かります」と感謝の電話とメールが届いた。

震災による石巻市の犠牲者は2991人（16日現在）で宮城県内の死者の約3割。不明者も2770人にのぼる。「避難者が多く、家庭から雑巾を集めることはできない状況」で、三浦さんが確認しただけで千枚以上が不足しているという。

こうした状況を青木校長が唐津地区の校長会で紹介し、引き続き送ろうと、大志小や鬼塚小、鏡中など近隣にも雑巾支援の取り組みが広がっている。西さんは「現地の『今欲しい』という声に耳を傾けていければ」と話す。

（村田駿介）

心ひとつに

この取り組みの様子から，被災地のために何かできることはないかを模索している学校や子どもたちが，ありがたいことに全国に多数いるということが分かった。この活動は，末永く継続していけるように働きかけていきたいと考えている。

（３）親の会情報交換会で震災時の状況を把握

平成２３年６月１７日（金），当センターを会場にして「平成２３年度第１回親の会情報交換会」を実施した。５月初旬に，県内にある障害のある子どもの親の会のうち，当センターに登録をしている１７団体に開催案内及び震災に関するアンケート調査用紙を FAX 送信した結果，７団体から回答を得ることができた。「震災に関するアンケート～震災時，震災後に困ったこと気付いたこと～」の集計結果は，情報交換会の資料として配付した。

情報交換会当日は６団体１４名が集まり，震災を体験した障害のある子どもたちの現状と課題，

必要な支援などについて情報交換を行った。

主な情報としては次のとおりである。

① 震災時，震災後の子どもたちの様子

高機能自閉症の子が１か月間わがままを言わずに過ごしていたという話をたくさん聞いた。我も忘れるほどの緊張と怖さ，不安の中で生活していたためではないかと医師は語っていたとのこと。６月現在の今では前の状態に戻っている。

② 避難所での子どもたちの様子

４日間小学校で過ごした。校舎も体育館もいっぱいだった。校長先生の計らいで体育館ステージ袖の一室を提供してもらい，そこで障害のある子どもの家族６世帯と一緒に過ごした。何もないので先生たちが段ボールを持ってきてくれたり，家が近くの人は自宅から毛布やコートを持ってきたりした。先生たちも３日間泊まってくれた。子どもたちも信頼できる先生たちがいたので落ち着いて過ごしていた。

③ 地域の理解

市町村では６５歳以上の名簿はあるが障害者の名簿は持っていない。災害時は７割以上が近所の人に助けてもらっていたという。地域の人たちに障害について分かってもらえることがとても重要である。避難所でパーティションの必要性をお願いしたが，担当した人は理解していなかった。

④ 療育手帳の活用

名取市では，市役所に行って療育手帳を見せて通院が必要なことを説明するとガソリンを入れることができる券を１枚くれた。名取市内の給油所３か所で２０ℓ入れることができた。

⑤ 特別支援学校の今後の役割

学校が避難所になることには，メリットデメリットがある。特に避難所が長引くと子どもたちの日常が取り戻せなくなる。ただ，卒業生や在校生にとって特別支援学校が避難所になってほしかったのは事実。教訓を生かしてほしい。

これらのことから，被災した障害のある子どもたちは，避難所でなかなか理解してもらえず，パーテーションを作ってもらったり，別室を用意してもらったりという配慮もすぐにはしてもらえないというのが現状であったことが見えてくる。今後は避難所等での障害者への配慮を強く求めていくための早急な手だてが必要と思われる。

（４）研修会を受講している教員へ震災に関するアンケート調査の実施

この震災での困難な状況の中で，障害のある子どもや保護者，かかわってきた教員がどのように乗り越えてきたか，震災直後，学校再開前，再開後に分けてアンケート調査を実施した。アンケートには，所属校種と担当している子どもの障害種別についても回答を求めた。質問項目は大きく３つである。一つめは「震災に際して，子どもたちを取り巻く状況で大変だったこと・困ったこと」について，二つめは「大変な状況の中で，とても助かったこと，役立ったこと，良かったこと」について，三つめは「こんなこと（もの・人・こと）があれば良かった！と思ったこと」についてである。

７月２７日実施の障害幼児研修会受講者に対するアンケート調査を皮切りに，その後１０月実施の特別支援教育コーディネーター研修（経験者コース）の受講者まで，１０本ほどの研修会受講者にアンケート調査を依頼した。

幼稚園，保育所，小中学校，高等学校，特別支援学校の教員約１８０人から広くアンケートを回収することができた。

主な記載内容は以下のとおりである。

【震災に際して，子どもたちを取り巻く状況で大変だったこと・困ったこと】

・家が被災し，避難所に行ったが落ち着かずに奇声を発したり，歩き回ってしまい，その際に障害を理解せずに「しつけが悪い」「迷惑だ」と言う人がいたりした。その後，担当者の配慮で個室に入れてもらい，助かった。

・児童の家が全壊。自宅の窓から津波が押し寄せ

る様子を見たり，近所に横たわる死体を見たりしてショックを受けていた。親戚の家へ避難後，仮設住宅へ入居するが，環境の変化が大きかったため精神的に不安定になった。

・学校を再開しても，学級の中でも転出入が激しかったので，自閉症のある子どもに限らず大変だった。教室掲示やクールダウンできる場所など空き教室での対応をして，できる限り震災前と変わらず学校生活を送ることができるように心掛けた。

・午睡のときに，突然思い出して大泣きする。ちょっとした風の音などにもパニックになる。登所時，家の人となかなか離れられない。

・避難所に行った家庭で，児童が声を出したり暴れたりするため,「困る」と行政担当に言われ，居たたまれず避難所に寝泊まりできなかったケースがあった。

・余震の度に「津波来る？」「大丈夫？」と不安がる。避難訓練時,「本物？」「大丈夫？」と不安が大きくなる。周囲の子どもたちがこのような状態になると理解できず，奇異な目で見てしまう。

これらのことから，障害のある子どもたちへの心のケアが喫緊の課題であることが見えてくる。教師や保護者など身近な大人が，子どもの心の安定を図るための手だてを身に付けておくことが大切であり，生活環境や学習環境を平常にもどすことが精神的安定を取り戻すのに効果があることが上記の例から読み取ることができる。また，避難所では，落ち着きを取り戻すことができる様々な工夫が必要であることが分かった。福祉避難所の啓発を含め，今後の避難所マニュアルの作成などに反映させていくことが大切であると思われる。

【大変な状況の中で，とても助かったこと，役立ったこと，良かったこと】

・避難所（Ｓ高校）に，地域ごとにまとめられたため，その児童のことを知っている人が多かったことは幸いだった。

・おもちゃ等の支援物資が届き，児童の好きなキャラクターものを教室に置くことで，新しい教室にも少しずつ慣れていくことができた。とにかく，児童が少しでも落ち着ける場を作っていった。

・南三陸の身内の葬儀や入院があったり，体調が悪かったりして子どもを見られないときに，一時的にあずかってくれるボランティアが居たため助かったようである。夏休みの「子どもクラブ（日中ボランティアが居てあずかる)」は利用者が多かった。

・避難所で落ち着かない子どもが山元支援学校で数日間，避難生活ができたので助かった。

・その子のことを理解している友達が周りにいたのでいくらか安心できた。

・地域の児童デイケアが再開し，家の中で引きこもるだけの生活から子どもが解放され，多少ストレス発散になったので良かった。

これらのことから言えるのは，障害のある子どもの周りにいる友達や地域の人々がその子どもの障害を理解し，受け入れていること，さらに，障害のある子どもを見てくれる，あずかってくれる場があることが，保護者を安心させ，確実なサポートになることが伺えた。

【こんなこと（もの・人・こと）があれば良かった！と思ったこと】

・安否確認のため，すぐ使用できるガソリンが満タンに給油された公用車，毛布，食料，非常電源，無線等があれば良かった。

・点字ブロックの修復，情報を提供できる視覚的手段。障害児でも安心して居られる避難所。

・障害のあるお子さんの家族のための避難スペース。地域の理解を日頃から広めていく必要があった。

・吸引や経管栄養をしている医療的ケアの児童だったので，発電機や充電器があればよかった。

・パニックや不安なときの対応マニュアルが各学

校にあればよい。多くの学校が避難所になっていて，障害のある子どもに対応できる教員，また対応経験が少ない教員にとって助かると思う。

これらのことから，障害のある子どもたちのために，常日頃から防災や減災のための教育やそのための準備が必要であることが分かる。そこで，特別支援教育の対象となる子どもたちに必要な防災教育のポイントを次のように考えている。

【障害のある子どもたちに必要な防災教育の５つのポイント】

① 平常時に講じておくべきこと
② 災害発生時の対応
③ 学校が避難所となる際の対応
④ 学校再開・復旧に向けた対応
⑤ 子どもたちの心のケア

今後，公開講座や研修会等でこれらのポイントを焦点化した講座や講義を組み入れて，障害のある子どもたちの支援者である保護者，教員に対して防災教育の研修の機会を提供していく必要がある。

（５）その他　当センターの相談・研修事業の見直し

被災した障害のある子どもたちへの支援を進めていくに当たり，「今何が必要か，今何ができるか」ということを常に意識して，当センターの相談事業及び研修事業を見直す必要に迫られた。まず，教育相談事業については，教育相談を実施する上で必要な支援を，次の３点から工夫した。

【教育相談を実施する上で必要な支援】

① 当センターの昨年度までの教育相談のケースの中から，継続支援の必要なケースをピックアップしていき，対応できるようにしていくこと。
② 特別支援教育地域支援コーディネーターと連携して被災地域の小中学校のニーズを把握して，会場を移して臨時の教育相談を実施していくこと。
③ ５月からの定期巡回教育相談会場が被災したり，避難所等になったりして使えないので，早急に代わりの会場を確保すること。

さっそく各特別支援学校に連絡して承諾をもらい，定期巡回教育相談の会場は，次のように変更した。

【定期巡回教育相談会場の変更】

南三陸地区会場
○南三陸合同庁舎　→　**気仙沼支援学校**

気仙沼地区会場
○気仙沼市鹿折公民館　→　**気仙沼支援学校**

石　巻地区会場
○石巻稲井公民館→石巻市役所→**石巻支援学校**

塩　竈地区会場
○塩竈市公民館　→　**利府支援学校**

岩　沼地区会場
○岩沼市総合福祉センター ｉあいプラザ
→　**支援学校岩沼高等学園**

以上５会場を４会場に変更した。変更せずに今まで通り実施する会場は下記のとおり。

大河原地区会場　○大河原合同庁舎
大　崎地区会場　○大崎合同庁舎
栗　原地区会場　○栗原合同庁舎
登　米地区会場　○登米合同庁舎

当センターには，被災した障害のある子どもの心のケアを主訴とした教育相談ケースは，まだ入ってきていないが，阪神・淡路大震災の場合では，４，５年経ってから心的外傷後ストレス障害（ＰＴＳＤ）を発祥した例がいくつもあるので，十分な対応が可能になるように，継続したサポート，支援に取り組む必要があると考えている。

【研修事業の見直し】

当センター主催の研修会は，被災した地域の学校再開時期に合わせ，予定より２週間ほど遅れの５月末から実施できるように準備を進めた。

まず，研修会受講の手引きとして配付していた「研修ガイドブック」の内容変更を，各学校へ周

知徹底するために，手刷りの**「宮城県特別支援教育センターの研修事業（変更版）」**を作成した。

直ちに７教育事務所に出向いて変更等について説明し，地教委を通して各学校へ配付をお願いした。

この研修事業（変更版）は，震災対応版として次の２点を変更の要とした。

① **研修時期の変更と中止**：研修会のスタートが２週間遅れとなったため，５月実施の研修会は６月実施に変更した。さらに，特別支援教育新担当者のための研修会第Ⅱ期に予定していた，小中学校を会場に授業参観をするなどの移動研修は中止とした。移動研修会場となる小中学校の被災状況を考慮しての判断であった。

さらに，事前に２月末に配付していた「研修ガイドブック」にない期日に研修期日を移動することを避けた結果，５月実施予定であった通級指導経験者研修会は中止とした。

② **講義内容の追加**：事前に依頼していた講義の演題だけでなく，**「災害時における子どもの心のケアや保護者への支援，連携の取り方」**等についても，講義内容に追加してもらうように研修会講師に依頼した。

その結果，以下の６人の講師に依頼した講義で内容を追加することができた。

○特別支援教育コーディネーター研修（幼稚園・小学校版）「発達障害のある幼児児童への適切な支援について」

○特別支援教育コーディネーター研修（中学校・高等学校版）「発達障害のある生徒への適切な支援について」

○特別支援教育コーディネーター研修（特別支援学校版）「発達障害のある児童生徒への適切な支援について」

○特別支援学校ミドルマネジメント研修会「特別支援学校における危機管理・保護者への対応」

○障害幼児教育研修会「保護者との連携を図りながらの支援」

○特別支援教育相談研修会「カウンセリングの基礎と実際」

これらの対応をした結果，研修会を受講した教員からは次のような感想が出された。

【受講者の感想】

・震災に関連しての話もあり，とても参考になった。避難訓練や引き渡し訓練はそれぞれの学校の対応を聞くことができて良かった。

・震災後の心のケアについて，とても参考になった。リラックスの呼吸法もとても良かった。

・被災した児童生徒に教育的な配慮をしながら，自分の心のケアにも上手くやっていきたい。

・阪神淡路大震災についてのお話は，実際に被災しているので胸に迫るものがあり，今後の指標となった。

・祖母が津波にのまれてしまったことを周りの先生方に言えず，感情を抑えたままでいたが，講師の先生が震災の体験を話し，感情を出していいことなど聞けて，少し心強く感じた。

このことにより，当センター主催の研修会等で災害時における子どもの心のケアを今後も取り入れて，受講者の教員に幾分でも子どもたちへの支援のヒントとなるものを提供していく必要があることが分かった。

３　終わりに

これまで述べてきた，特別支援教育センター震災プロジェクト５つの取り組みを，**資料集『東日本大震災での事例から「障害のある子どもたちに寄り添う支援に向けて」～学校としてできること～』（仮称）**としてまとめ，当センターのホームページに今年度中に掲載していく予定である。被災した障害のある子どもたちへのサポートの一助になるように，学校としてできることを取り上げていきたいと考えている。今後も，当センターでは「今何が必要か！今何ができるか！」を常に意識した学校支援に取り組んでいきたい。